地域・テーマ

島根県雲南市

清嵐荘をハブとした「学びと実践の場（キャンパス）」の創出による地域課題解決の推進

事業概要

- 温泉施設「清嵐荘」を核に、市全域をフィールドとした「薬湯キャンパス」を構築
- 教育・プロデュース・起業支援など、多様な事業者の連携による多角的ビジネスを創出
- 課題解決に向けた実践型の学びを通じ、人口減少に対応する新たな経済循環を形成



出雲國風土記に薬湯と記され
長い歴史をもつ出雲湯村温泉



棚田100選に選出された美しい棚田

◆ 地域の概要と地域資源・課題

｜地域の概要｜

- 地理的特性
  出雲空港から車で40分。斐伊川の清流と中国山地に抱かれた、都市近郊型の豊かな中山間地域
- 産業構造
  農林業と製造業（電子部品、自動車部品等）が地域経済の基盤となっており、有機農業も盛んである。さらにお米（仁多米に並ぶブランド）に加え、牛乳・乳製品、地酒といった「食」のブランド力も非常に高い。
- 人口・担い手状況
  総人口約3.4万人。高齢化率は約40%
  若年層の流出が続き、生産年齢人口の減少が顕著である。

｜地域資源｜

- 宿泊・温泉施設（国民宿舎清嵐荘（せいらんそう）、出雲湯村温泉（いずもゆむら））
- 歴史（たたら製鉄）
- 神話に関連した資源（斐伊川（ひいかわ）、加茂岩倉遺跡（かもいわくら）、須我神社（すが）、神楽（かぐら）など）
- 森林資源（市域の約80%が林野）
- 特産品・加工食品
  （株式会社 吉田ふるさと村の商品【たまごかけ専用醤油、ドレッシング、唐辛子、お餅等】、地元産無添加の加工食品）
- アニメ「秘密結社鷹の爪」とキャラクター吉田君
- 教育者・加藤歓一郎先生（産業教育の実践者）

｜地域課題｜

◆ 急速な人口減少と高齢化率の上昇が進んでいる。中でも20～30代の転出超過が顕著で、地域活動の担い手が不足し、課題先進地となっている。

◆ たたら・神話・自然・農業・温泉など多様な資源があるが、全国的な知名度は高くなく、観光客の来訪が少ない。また、日帰り観光が中心で、宿泊や長期滞在につながる仕掛けが不足している。（事業者間の連携不足）

◆ 雲南市が「課題先進地から課題解決先進地へ」というテーマを掲げているが、地域資源を活用した経済活動と課題（人口減少・森林保全・産業創出など）解決の施策の連動性が弱い。

◆ 事業推進体制

株式会社 吉田ふるさと村
事業主体

雲南市
事業支援

＋

マッチング先

森林組合・農事組合
(事業協力)

【地域外】
大学生・プロダクト製造事業者・
マーケティングアドバイザー
(事業協力)

【地域内】
(公財)鉄の歴史村地域振興事業団・教育関係者・
地域おこし協力隊・しめ縄クラブ・須我神社・
プロダクト製造事業者ほか
(事業協力)

雲南市観光協会
(販売・PR協力)

◆ 支援の方針・内容

| 支援の方向性 |

- 「薬湯キャンパス」構想を持続可能な地域ビジネスとして確立するため、伴走型支援を実施する。
- 「薬湯キャンパス」という共通コンセプトのもと、全員が同じ方向を向いて動ける「事業の設計図」の完成に焦点を絞り、基幹産業化を目指す。

| 具体的な支援内容 |

- **将来構想の可視化**
  経営デザインシートを活用し、事業の将来構想を明確化
- **アクションプランの具体化**
  「農村生活×教育事業」の内容の具体化および、プロジェクトの次年度以降のアクションプランの検討


検討会の様子

◆ コーディネーターと専門家による支援

| コーディネーター |



小倉 綾氏　中小企業診断士

売れる商品・儲かる仕組み作りを中心としたコンサルティングや研修に従事。
地域と取り組む地域ブランド化では、地域資源の発掘・磨き上げから販路開拓のほか、地域住民や関係機関等の連携など、多方面から支援。

| 専門家 |

株式会社 MTEC　代表取締役社長　**加藤 一博**氏
中小企業診断士　(戦略・体制づくり、事業化支援)

企業の強みをベースとしたパーパス・ビジョンおよび中長期の経営戦略策定支援を得意とする。「経営経験は人生を３倍にする価値がある」「ビジョンは社員がワクワクするものを...」が信条。

◆事業の進捗と成果

Before(支援開始時)

- 事業構想は存在していたものの、具体的なビジネスモデルや実行計画として整理されていなかった。
- 関係者間の連携が不十分であった。

After(支援終了時)

- 「薬湯キャンパス」構想を経営デザインシートとして可視化
- 地域内外の関係者を巻き込んだプロジェクト体制の構築
- 教育事業を中心とした具体的なアクションプランが策定され、実証に向けた準備段階に移行

｜主な成果｜

●「薬湯キャンパス」構想の具体化
　・2035年を見据えた長期的な事業構想を策定

●2026年度アクションプランの策定

◆ 今後の展開

■ **ビジネスモデルの具体化**

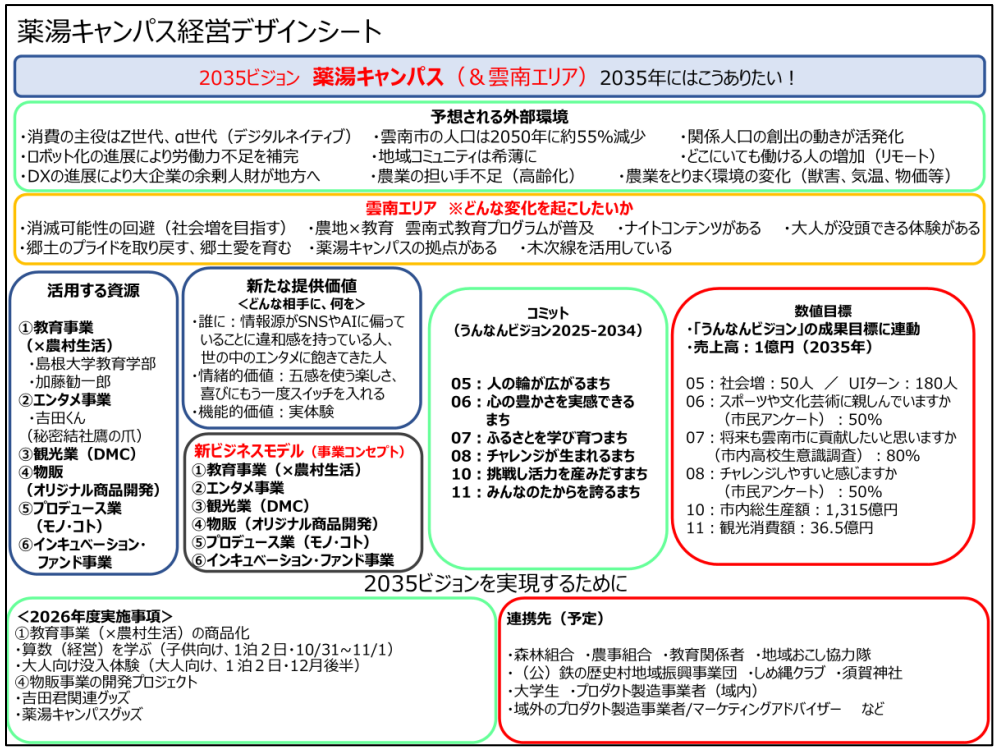
薬湯キャンパスで構想した６つの事業
①教育事業（×農村生活）　④物販（オリジナル商品開発）
②エンタメ事業　⑤プロデュース業（モノ・コト）、
③観光業（DMC）　⑥インキュベーション・ファンド事業）
のうち、2026年度は以下の２つの事業の具体化に着手

①教育事業（×農村生活）
子ども向け：算数(経営)を学ぶ農村体験プログラム
（10月下旬～11月上旬頃実施予定）
大人向け　：没入型体験プログラム（12月後半頃実施予定）

④物販（オリジナル商品開発）：地域内外の事業者や大学生と連携した開発プロジェクトを開始

■ **組織化の推進**

・2026年７月に事業の正式キックオフを予定。域内事業者を中心に事業への参画を要請し、組織化に向けた準備を行う。
・プロジェクトメンバーによる定例会議を継続し、アクションプランの進捗管理と改善サイクルを回す。



薬湯キャンパス　経営デザインシート

地域・テーマ

愛媛県八幡浜市

柑橘資源を活かした加工事業の高度化と
観光・アップサイクル※による持続可能な地域ブランドの構築



媛一みかん
(愛媛県西宇和地域)



みかん畑風景
(愛媛県西宇和地域)

事業概要

- ●自社ジュース工場の稼働率向上と受託の拡大に向けた製造ラインの整備およびブランド設計の支援を実施
- ●柑橘の収穫・加工体験ツアーの造成を推進
- ●廃棄される柑橘の花や皮を活用したアップサイクル商品の開発支援を実施

※アップサイクル：廃棄予定のものをアイデアやデザインによって価値の高い新しい商品へ生まれ変わらせること

◆ 地域の概要と地域資源・課題

| 地域の概要 |

- 地理的特性
  愛媛県西部の八幡浜市を中心とする西宇和地域
  温暖な気候と段々畑を活かした日本有数の柑橘産地
- ブランド力
  全国的に極めて高い評価を得る高品質なみかんを生産
- 現状
  近年は、生産者の高齢化や市場価格の変動、加工・流通の高度化への対応などの課題に対し、生果の販売に加え、加工品の高付加価値化と販路拡大が重要なテーマとなっている。

| 地域資源 |

- 多様で高品質な柑橘類（みかん・デコポン・せとか・紅まどんな等）
- 自社のジュース工場（西予市多田工場）
- みかんや柑橘類の農場での収穫体験や、工場でのジュースづくり体験プログラム
- 摘蕾（てきらい）の過程で廃棄される「みかんの花」

| 地域課題 |

◆ 基幹産業であるみかんを活用した加工分野において、既存設備の稼働率向上や独自の商品開発力の強化が課題となっている。
◆ みかん産地としての知名度を活かしつつ、ブランド力の高い商品の開発による収益率の改善が求められている。
◆ ＯＥＭ（受託製造）の積極的な獲得を通じた新たな経済基盤の構築も重要な課題である。

◆ 事業推進体制

農ぷらす愛媛株式会社
販売の主体

小林果園
農業者・加工場

果実搾汁企業
1次加工場

八幡浜市
事業支援

＋

マッチング先

外資系・パティスリー
（商品開発・販売）

意食充
（販売協力・プロデュース）

青果・加工惣菜グループ企業
（百貨店・スーパー）

老舗市場系青果流通企業
（仲卸事業者）

大阪シーリング
（資材会社）

◆ 支援の方針・内容

｜支援の方向性｜

愛媛県産柑橘を活用した加工事業の収益性向上と販路拡大を目的として、以下の取組を中心に伴走支援を実施
・ジュース製造ラインの整備と資材設計支援
・受託製造の事例創出
・柑橘生果の流通営業支援

｜具体的な支援内容｜

・製造ラインの改善検討と機械導入支援を実施。商品ラベルやパッケージ（シール・箱等）の設計支援を行い、ブランド商品として販売可能な商品仕様を確立
・外資系ブランドとのコラボ商品を製造し、ブランド力を活かした販売展開と販路開拓を支援
・みかん・デコポン・せとか・紅まどんな等の生果について、首都圏や高付加価値市場への流通営業を支援。加工事業と生果販売の両面から、地域農産物の価値向上を追求


現地工場視察の様子

◆ コーディネーターと専門家による支援

｜コーディネーター｜



石井 宏和氏
株式会社 グーニーズグループ　代表取締役

地域プロデューサー。農林水産省ＬＦＰ政策推進委員（2023年-2024年）　運輸観光系企業や地域商社活動を通して販路を起点とした商品流通や地域課題の事業プロデュースに携わっている。

｜専門家｜

意食充株式会社　代表取締役　**上山 琢矢**氏
（販売協力・商品プロデュース）

地域商社事業とフードビジネスの国際展開を推進し、農水分野の事業開発やＤＸ、アジア市場（ベトナム・シンガポール等）への販路開拓を担う実務家。
（青果流通・加工品開発・物流倉庫管理）

◆事業の進捗と成果

Before(支援開始時)

・ジュース製造設備の稼働率が低く、加工事業の収益性が十分に確保されていない状況であった。
・製造受託に係る営業資料が整備されておらず、外部からの受注が困難な状況であった。
・パッケージやブランド設計が未整備であり、生果の販路も限定的であることから、知名度が低い状況であった。

After(支援終了時)

・製造ラインの改善と設備導入検討により、稼働率向上の方向性を確立
・商品ラベル・パッケージの刷新により、ブランド商品として販売可能な仕様を整備。**外資系とのコラボ製造を実現**
・営業用の資料を整備し、**新規受託営業が可能な体制を構築**
・生果のサンプリングと商談を実施し、2026年度の受注見込を確保

｜主な成果｜

●ジュース工場稼働率向上
ジュースの機械導入支援　１件
商品化数　１件

●製造受託の営業資料
商談件数　４件　→**マッチング件数　１件**
売上成果　約1,000万円（約４万本）

●生果の営業と認知度向上
商談件数　２件　→**マッチング件数　１件**



媛一みかんジュース商品
（日本全国）



瓶の蓋の仕様を変更

◆ 今後の展開

■ **媛一みかんジュースの拡大**
・加工飲料（ジュース）　：2025年度の４万本の実績をベースに、2026年度には**年間８万本の製造出荷**を目指す。
・受託（ジュース）：営業を強化し、2026年度には**工場の稼働率を年間８%向上**させる。

■ **生果・花・皮の未利用資源の活用**
・生果（みかん・デコポン）：首都圏百貨店での取り扱い店舗、エリアを拡大し、認知度と利益の向上を図る。
・花や皮のアップサイクル：研究開発を継続し、フードツーリズム等を通じて地域内での新たな需要の獲得を図る。

地域・テーマ

鹿児島県南さつま市

らっきょうの機能性に着目した腸活市場の開拓
地域資源を活用した新たな需要創出

事業概要

- 鹿児島大学との共同研究成果を活かし、水溶性食物繊維らっきょうフラクタンの働きや腸活における価値を整理
- これまで「カレーのお供」としての印象が強かったらっきょうについて、スーパーフードとしての魅力発信を推進
- 地域事業者等と連携し、らっきょうの新たな需要を創出し、販路を拡大



らっきょうの栽培地
日本最長の吹上砂丘



水溶性食物繊維豊富な
らっきょうフラクタン

◆ 地域の概要と地域資源・課題

｜地域の概要｜

- 地理的特性
・南さつま市は、薩摩半島の南西部に位置した総面積283.59㎢の地域
・市の総面積の58.9%が森林。河川流域に沿って開けている平野
・海岸線の北西部は砂丘地帯を形成
- 産業構造
・産出額は農畜産業が約132億円、漁業約８億円、工業約457億円、商業約407億円であり、農畜産業が地域の主産業の一つ
- 人口
・2026年の総人口は30,554人、総世帯16,437世帯で、人口は10年前に比べ15%減少
・総農家数は1,317戸、うち販売農家数が685戸

｜地域資源｜

- 鹿児島県のらっきょうは、日本最長の砂丘である吹上砂丘（いちき串木野市～南さつま市）を主な産地とし、生産量は2022年時点で2,220tと、鳥取県（生産量2,300t）に次いで全国２位、シェア33.1%を占める主要産地である。
- 砂丘地帯の自然環境や地温等の自然条件と長年の栽培技術が、白くシャキシャキしたらっきょうを生み出している。

｜地域課題｜

◆ 鹿児島県のらっきょうは生産量が全国トップクラスである一方、鳥取県に比べて消費者の認知度が低い。
◆ 従来「カレーライスのお供」として消費が限定されており、新たな視点による市場開拓とブランド強化が求められている。
◆ 地域の基幹的農業従事者の67%が65歳以上と高齢化が進み、砂丘地においても耕作を継続できない生産者が出ている。このため、地域が連携して産地の維持・発展を図る体制の確立が必要である。

◆ 事業推進体制

有限会社 エスランドル
加工販売

江籠豊作
農業者

南さつま市
事業支援

＋

マッチング先

鹿児島大学
(共同研究)

販路先
(青果店チェーン企業)

JA南さつま らっきょう生産部会
(生産・PR連携)

南さつま市職員
(摂取実験協力)

◆ 支援の方針・内容

｜支援の方向性｜

・らっきょうの成分に関する知見を整理し、「スーパーフード」としての概念定義と、体系的なＰＲ戦略を構築
・地域ぐるみの取組としての商品やサービスを展開

｜具体的な支援内容｜

- 南さつま市と連携し、女性約100人が参加するらっきょうの摂取実験を実施・分析支援
- 摂取実験の結果や鹿児島大学藤田教授との共同研究を発表するシンポジウムを企画・開催し、当日のディスカッションを支援
- らっきょうフラクタンや腸活をフックに、百貨店地下食品売場に青果店を展開する企業へ紹介し、新たな商品の販売を促進





シンポジウムのパネルディスカッション

◆ コーディネーターと専門家による支援

｜コーディネーター｜



松田 恭子氏
株式会社 結アソシエイト　代表取締役
日本政策金融公庫 上級農業経営アドバイザー
農林水産省地域資源活用・地域連携エグゼクティブプランナー

農や食のコンサルタント・コーディネートを仕事とする。
本事業では研究成果を活用したマーケティングや企業コーディネート、摂取実験の実施・分析を支援。

｜専門家｜

田丸 保夫氏
元・鹿児島県農業開発総合センター大隅支場長
元・鹿児島県農業・農村振興協会６次産業化推進部長

県在職時は食品加工の研究を行い、現在も県内農業者の相談に乗る。
本事業では、食品の成分と表示に関する助言や、シンポジウムにおける食品加工の専門家としてパネラー登壇

◆事業の進捗と成果

Before(支援開始時)

・鹿児島大学との共同研究により新たな知見は得られつつあったものの、具体的な活用方法は未検討であった。

・共同研究の成果が一般消費者に十分に発信されておらず、地域内での認知も低かった。

After(支援終了時)

・共同研究で得られた知見の公表
鹿児島大学がこれまでの研究成果を論文（総説）として発表

・研究成果を地域内に広く周知しブランド化に向けた機運醸成
・研究成果を地元や一般消費者に広く周知するため、シンポジウムを開催した。
・小売店のバイヤーにらっきょうフラクタンや腸活について説明し、理解を得た。
・地元生産者が、らっきょうの新たな魅力（腸活やらっきょうフラクタン）に気づいた。
・地域ぐるみでらっきょうのブランド確立に向けた機運が高まった。

｜主な成果｜

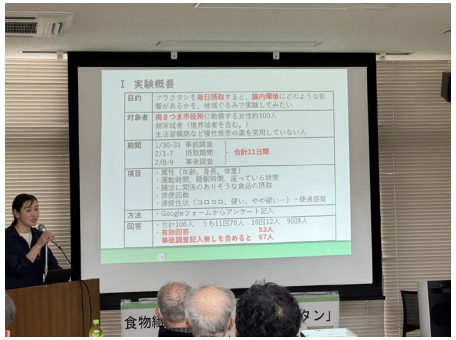
●らっきょう摂取実験
南さつま市役所職員ら109名が参加し、有効なデータを取得

●シンポジウム開催
関係者や一般参加者を含め39名が参加し、知見を共有

●販路・商談実績
らっきょうフラクタンや腸活をアピールした商談件数：３件
うち新規成約件数：１件



鹿児島大学藤田教授の研究成果発表



らっきょう摂取実験結果の説明

◆ 今後の展開

■ **地域ブランドの確立と販路拡大**
自然条件や栽培方法と結びついた特性を整理し、地域ぐるみで「らっきょうブランド」の確立に取り組む。また、都内の百貨店地下食品売場の青果専門店等での販売を継続するとともに、「らっきょうフラクタン」や「腸活」をキーワードとした効果的なＰＲ展開を検討する。

■ **スーパーフードとしての認知向上**
食・栄養・健康に携わる関係者に継続的に働きかけ、「スーパーフード」としてのらっきょうの認知度向上を図る。あわせて、らっきょう摂取実験を他の職域にも拡大し、企業や職場の健康意識向上のきっかけとする。

■ **「腸活のまちづくり」への発展**
地域の栄養士や飲食店と連携し、腸活をテーマとした食体験を提供する取組を実施する。これらの多角的な取組を通じて、らっきょうをはじめとする「腸活のまちづくり」へと事業を拡大する。

地域・テーマ

鹿児島県徳之島町・伊仙町・天城町

徳之島コーヒー等の特産品化を通じて、農業と環境を両立させる「環境保全型農業」の実現を目指す

事業概要

- 国産コーヒー等の新規農産物の育成・特産品化を進め、３町横断の生産体制整備とブランド構築を推進
- サトウキビ残さのバイオ炭化と農地施用により、土壌改良、作物の生育促進、赤土流出抑制効果の検証を実施
- 豊かな自然やスポーツ施設等を活用し、グリーンツーリズムやパラスポーツ支援を通じたビジネスの創出



豪雨の際に土壌（赤土）が海洋に流出しサンゴ礁等に影響



サトウキビ残渣、未利用バイオマス資源ハカマ（茎・葉の部分）

◆ 地域の概要と地域資源・課題

｜地域の概要｜

- 鹿児島県奄美群島に属する周囲約80km、人口約2.3万人の島（徳之島町・伊仙町・天城町）
- 出生率は全国トップクラスだが、雇用機会不足により若者の流出が続き、人口減少が課題
- 2021年に世界自然遺産登録。闘牛文化や長寿・子宝の島として知られる
- 主要産業は農業・漁業・加工業。サトウキビ、ジャガイモ、柑橘類、マンゴー等の生産が盛んで、観光振興や国産コーヒー栽培にも注力
- バイオマス資源の活用や土壌劣化による赤土流出など、環境面の課題を抱える

｜地域資源｜

- バイオマス資源：
  サトウキビ残さ（ハカマ）、牛糞（有効利用・循環利用の推進）
- 農産物：
  サトウキビ、ジャガイモ、タンカン、キャッサバ、国産コーヒー（生産者組織による商品化、AGFによる支援）
- 自然環境：世界自然遺産（奄美群島随一の生物多様性）
- 生活文化：
  包摂的（インクルーシブ）な共生社会（障がい者と健常者が共に暮らす文化）
- スポーツ施設：陸上競技場・プール等（実業団・プロチーム合宿地）
- 医療・ヘルスケア：医療体制の充実、「健康長寿・子宝の島」ブランド

｜地域課題｜

◆ 徳之島コーヒーの事業化・ブランド化を通じた新たな農業ビジネスの創出により、新規就農者の呼び込みが求められる。
◆ 土壌劣化や赤土流出への対策として、バイオ炭を活用した土壌改善および環境再生型農業の推進が求められる。
◆ パラスポーツやグリーンツーリズムを活用した長期滞在型プログラムの開発により、滞在型観光および関係人口の創出が求められる。

◆ 事業推進体制

合同会社 あまみ徳之島絆ファーム
販売の主体

土づくり勉強会
サトウキビ、ジャガイモ、タンカン農家

徳之島町、伊仙町、天城町
事業支援

＋

マッチング先

味の素AGF株式会社
（徳之島コーヒーの事業化・ブランド化）

大手自動車メーカー研究所
（ハカマ由来のバイオ炭施用試験）

徳之島コーヒー生産者事業組合
（徳之島コーヒーの生産拡大）

NPO法人 パラスポーツサポーター
（観光協会（パラスポーツアイランド宣言））

◆ 支援の方針・内容

｜支援の方向性｜

・サトウキビ残さなどの未利用バイオマスをバイオ炭として活用し、土壌改善と農産物の高付加価値化を図るとともに、徳之島コーヒーの生産拡大とブランド化を進める。
・地域の包摂的文化を活かした「パラスポーツアイランド構想」により、関係人口の創出を目指す。

｜具体的な支援内容｜

- 「徳之島の土と農業の未来を考える会」を立ち上げ、専門家を招いた勉強会を開催し、土壌改善や有機農業等への取組を推進した。
- 大手自動車メーカー研究所と連携し、サトウキビ残さ「ハカマ」を炭化し農地に施用することで、土壌改善、赤土流出抑制、作物収量向上を検証する研究プロジェクトを立ち上げた。
- 伊仙町中心であったコーヒーの生産体制を徳之島町・天城町へ拡大する取組を推進した。また、３町連携による「パラスポーツアイランド宣言」に向けた協議会設立の検討を進めた。



土づくり勉強会の開催
（多くの生産農家、自治体関係者が参加）

◆ コーディネーターと専門家による支援

｜コーディネーター｜



加藤 芳男氏
ファーストペンギン・ユニオンLLC代表

日経BP総研のプロデューサーとして地域創生のプロジェクトに数多く手掛けてきた。徳之島をパラスポーツの聖地とする「パラスポーツアイランド計画」を地域メンバーとともに推進。本事業では、農業・バイオ炭（カーボンクレジット）をテーマに地域連携をコーディネート。

｜専門家｜

ワケンピーテック株式会社　開発本部執行役・部長　**山谷 雅和**氏
公益財団法人 日本ヘルスケア協会　土壌で健康推進部会委員
土壌改善実証の設計および技術指導支援

徳之島のサトウキビ畑の土壌改良パイロット事業を３年前から指導。農業用微生物開発に従事し、全国の農園で指導している。

◆事業の進捗と成果

Before（支援開始時）

- 土壌劣化や赤土流出といった環境課題が顕在化していたが、バイオマス資源を活用した土壌改良に関する具体的な取組や実証は未実施であった。
- 徳之島コーヒーの事業化は進められていたが、生産体制は伊仙町に限定されており、生産者の高齢化や生産量の低迷が課題となっていた。
- 観光については、長期滞在型の受入体制やコンテンツが十分に整備されておらず、地域資源を活用した関係人口創出の仕組みが未構築であった。

After（支援終了時）

- サトウキビ残さ「ハカマ」を活用したバイオ炭の製造・施用に関する実証プロジェクトが、大手自動車メーカーの研究所と連携して立ち上がり、試験圃場の設置や生産者を巻き込んだ取組が開始された。
- 徳之島コーヒーの生産ネットワークが拡大し、伊仙町に加え徳之島町・天城町への栽培体制が広がるなど、島全体での生産基盤強化に向けた動きが進展。
- ３町および徳洲会徳之島病院の連携により、「パラスポーツアイランド宣言」に向けた合意形成を進め、協議会設立に向けた準備体制が構築された。

主な成果

●バイオ炭による土壌改善実証プロジェクトの始動
- 徳之島町に試験圃場を設置し、バイオ炭施用実証研究を開始
- 生産農家向け勉強会を４回開催（毎回20～30名参加）
- 伊仙町においてもジャガイモ畑での施用試験を開始

●徳之島コーヒーの生産ネットワークの拡大
- 栽培地域が伊仙町から徳之島町・天城町を含む３町へ拡大
- 若手生産農家を中心とした事業協同組合設立の検討を開始
- 天城町の新規就農研修プログラムへのコーヒー栽培導入を計画

●「パラスポーツアイランド宣言」の具体化
- ３町・関係機関による協議会設立準備委員会が発足
- パラアスリート合宿誘致等の取組を開始予定
- トライアスロン大会における味の素AGFのパラチーム企業協賛・支援が実現



徳之島町の試験圃場では、区画を区切ってバイオ炭の施用試験がスタート



徳之島トライアスロン大会に、AGFが支援するパラアスリートチームが参加



徳之島で育つコーヒーの実

◆ 今後の展開

- ■ サトウキビ残さ「ハカマ」を活用したバイオ炭の事業化を検討。堆肥センターや自治体と連携し、炭化炉導入を含めた事業化を目指す。
- ■ 若手生産者を中心に徳之島コーヒーの生産拡大を推進。オーガニック栽培やバイオ炭活用による付加価値化を図る。
- ■ パラスポーツアイランド宣言を契機に、パラアスリート合宿誘致やスポーツ交流を進め、医療・健康資源と連携した長期滞在型ツーリズムを推進。